

2014.6.21

熱帯森林利用のローカル・ガバナンスの可能性に関する地域間比較研究 研究会

「熱帯森林の“豊穰性”」 発表要旨 竹内 潔

東アフリカなど他の地域からかなり遅れたが、今世紀に入って、中央アフリカ熱帯森林帯においても、住民参加を謳う森林保全管理が導入されるようになった。しかし、実際には、政府や自然保護 NGO が一方的に設定したゾーニングによって地域住民の森林利用が著しく制限され、住民の生活文化の存続が困難になっている例も少なくなく、とりわけ、狩猟採集を生業としてきたピグミー系民族集団は厳しい状況に置かれている。

本報告では、このような状況を踏まえて、森林と地域住民の関係をめぐる論説を整理し、研究者がローカルな価値を媒介して、現在の森林管理を支えるグローバルな価値論理への対抗言説を立てる可能性について、アカ人の狩猟活動を例として探った。

まず、熱帯森林住民についての論説は、以下の2つに大別される。

- 1) 過去においては技術水準が低かったために環境破壊に至らなかったが、外部からの経済的・技術的誘因があれば経済的便益のために森林や生物多様性を破壊する功利主義的な存在とする言説
- 2) 生業文化に埋め込まれた意図的あるいは（小規模人為攪乱などの）非意図的な「在来の知」によって森林の持続的利用や生物多様性を維持する環境と調和した存在とする言説

しかし、森林を希少な経済的・生物学的な資源だと前提し、持続的利用と生物多様性保全の尺度で地域住民の営為を評価する点では、どちらの住民像も同工異曲である。「資源の希少性」の尺度に立つ限り、現地住民は外部で考案される「科学的」管理に掬いとられて、便益調整や啓蒙が施される操作対象にとどまり続ける。

次に、ローカルな森林の価値の事例として、アフリカ、コンゴ共和国の熱帯森林に居住するピグミー系狩猟採集民アカ人の集団網猟を検討した。集団網猟は、参加者数や猟場の生態学的特徴に応じた技法やエモノの獲得機会平準化のルールを備えたすぐれて技術的な食糧獲得手段である。そして、同時に、生活単位である家族集団が複数集まって協働し、交流する社会的営為でもある。参加者たちは、狩猟に費やすのと同程度の時間を歓談に費やし、さらに、猟果が芳しくない場合でも、歓談時間を減らして猟の回数を増やし、網で囲い込む森林面積を拡大してエモノの獲得可能性をあげるという対処をとらない。

このようなアカの狩猟実践の根底にあるのは、不運（不猟）だけでなく（そのうち）必ず幸運（豊猟）も与えてくれ、交流と歓談の機会をたっぷりと提供してくれる森林の「豊穰性」に対する信念である。アカ人にとって、森林は個々の経験や人生と分かちがたく結びついた生きられる場であって、人間に様々な経験を供する豊穰の価値（即自的価値）は認められても、使用価値や交換価値などの経済的便益や生物学的多様性が産み出される客体化された「資源」ではない。生物学的多様性や持続的利用などの「希少性」の「大きな物語」に対して、アカ人のような政治的凝集力をほとんど持たない人々の様々な「小さな物語」を文化保全という別の「大きな物語」の内実へと繋いでいくことが、現地に足場を置く研究者がなしうる仕事であり、また、西欧近代由来の自然観から脱却した新たな視野の地平を拓く橋頭堡になりうると思う。